



TITLE:

学生の声

AUTHOR(S):

---

CITATION:

学生の声. Cue 1999, 3: 53-53

ISSUE DATE:

1999-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/57783>

RIGHT:

## 学生の声

### 世紀末と私

電気工学専攻 奥村研究室 博士後期課程3回生 杉田 寛之

私は昭和最後の年に工学部電気系に入学し、大学院修士課程電気工学専攻を修了後、2年半の会社勤務を経て、博士課程に再入学しました。現在は4回生および修士課程同様、MHD発電の数値解析に関する研究を行っています。従来（戦後？）の我が国の慣習から見れば、異色の経歴と呼ばれる部類に入るかと思いますが、短いながらも会社勤務で得た経験は決して無駄ではなかったと感じています。特に、高度成長期を通じて今日の経済大国を築いてきた「まじめに働けば報われる社会」から、バブル景気の崩壊後のこの不況の中、効率重視の「価値のある者だけが生き残る競争社会」に移行しつつある様を、上司や同僚、生産現場の方々などとの仕事を通じて体感できたことは、今後の人生における貴重な財産となりました。

21世紀を間近に控えて、「高度情報化社会」や「情報通信」、「マルチメディア」という言葉が豊かな社会を約束する「魔法の言葉」のように使われています。確かに現在、「インターネット」や「電子メール」、「携帯電話」といった、私が大学に入学した当時には身近に存在しなかったものが、今では「当たり前なもの」、「なくてはならないもの」になっています。しかし、一方でこの地球上には、戦争、貧困、エネルギー、環境などの問題が以前よりも深刻さを増しており、現状の「景気」、「経済」至上主義のままでは、人類の未来は悲観的と言わざるを得ません。

私は、今後研究者として、単なる「金銭的価値」にとどまらず、生活や環境、文化を豊かにする「社会的価値」のあるものを世の中に提案し、実現できるような研究をしていきたい、と考えています。まさに「言うは易し、行うは難し。」ですが、核となる専門分野をより深めるのちもちろんのこと、異なる分野、国、考え方の人々との交流から学び、広い視野を持つと同時に、自分の経験を少しでも後輩達に伝えることで、「楽しい日本。明るい世界。」づくりに貢献したいと思います。まだまだ、「サッカーのユース代表」や「宇多田ヒカル」には負けられません。

### 大学での研究（工業応用と基礎研究の狭間）

電子物性工学専攻 橘研究室 博士後期課程2回生 高橋 和生

電気電子の分野で学んだこの8年間、常にこの分野と産業との密接なつながりを感じてきました。特に、研究室に所属してからは、自分の研究テーマの産業への応用を意識するようになりました。私は、これまで半導体プラズマプロセスに関する研究に携わってきました。この分野では、企業の研究が多く為されており、その研究による技術の発達が目立ちます。学会で発表される企業の研究成果は、製品化という具体的な目標があることから、私たちの成果とは、論点や視点が異なります。このことに、興味を持たれるのと同時に、企業が作っている世の中の流れの中で、大学で私自身は何をしたらよいのかを考えさせられることが多々あります。その中で、最も興味のある物性の基礎研究分野と一般社会に対して意義深い工業的応用分野、この2つの狭間で自分のテーマの位置付けを幾度となく考えました。社会での要求が突きつけられ、研究の意義が問われる中、比較的のんびりと興味本位だけで研究をしている自分に不安を感じたこともあります。しかし、個人の発想を大切にする風潮もあり、今では、そのことを支えにしながら自信を持って研究に取り組んでいます。まだ学生で研究については右も左もわからない身分でありながらも、大学に居るからこそできる研究を時間にとらわれずに行いたいという願望があり、それが自信につながっているのだと思います。そして大学に居る間、いつかは自分が社会に対して何か新しい提案ができることを希望とし、科学という大きなテーマに挑戦していきたいと思っています。まだ今は、研究で時間的にも精神的にも余裕がありませんが、自分と産業との接点を見出し、いずれは社会全体を見渡せるゆとりを持つことができればと思います。企業との交流が多い恵まれた環境にあるこの研究科で、産業との関わり合いから多大な刺激を受け、様々な経験をこれからできることに期待したいです。